

夏、私たちはヒロシマを見た：

平和の尊さを学んでもらおうと市が毎年行っている中学生広島非核平和研修。第六回を迎えた今年は、市内の中学生九人が八月五日から三日間、平和折念式典への参列、平和記念資料館の見学などを行ってまいりました。被爆地ヒロシマで何をみて、感じてきたのか、各校代表の五人の感想をご紹介します。

広島研修に参加して

新飯田中学校 横山沙織

広島に着いて、まず私が見たものは、高いビル、広い道路、そこで動くたくさんの方や人、それはまるで東京のようでした。でも広島には東京にないものがありました。それはたくさん緑です。整備された広島を見て、五十二年前に原爆が投下されたのがそのよう、そのときの被害の様子は想像することもできませんでした。

平和記念資料館で私が見たものは、来るのときに見た広島とは違うヒロシマでした。一九四五年八月六日午前八時十五分止まった時計、お母さんが子供に持たせた白米のお弁当が灰になって黒くなったもの、ガラスの瓶があまりの熱さで変形したもの。その中でも一番心に残ったものは原爆によってやけどを負った皮膚や爪でした。それは私と同じ中学生の方のものでした。原爆はたくさん命を瞬時に奪ったのです。



前列左から萩原由来さん(北中)、後藤李佳さん(庄瀬中)、武田校長(一中)、谷川翔栄さん(一中)、剣洋人さん(北中)。後列左から横山沙織さん(新飯田中)、吉田理恵さん(一中)、小林由紀さん(白井中)、山田洋子さん(北中)、佐藤裕美さん(庄瀬中)。

五十二年前の出来事

白根第一中学校 吉田理恵

八月五日、広島を初めて踏んだとき、本当にここに原爆が落ちたのかと思いました。ビルが建ち並び、多くの車が走り、木は青々と茂り、広島は五十二年前の出来事を何も感じさせませんでした。平和記念資料館には、いろいろなものが展示されていました。広島に原爆が落とされた理由は、①都市の大きさや地形が原爆の破壊力を試すのに適当で、投下後の効果を確認しやすかったこと、②軍関係の施設が集中した軍都であり、しかもそれほど空襲を受けていなかったこと、この二つの理由だけで投下目標にされたそうです。しかも長さ三メートル、重さ四トン、直径0.7メートルの爆弾は、小倉、新潟にも投下されようとしていたそうです。これを知って本当にひどいと思いました。資料館には戦争中の市民生活や学校生活、子供たちが遊んでいたおもちゃ、爆弾の模式図なども展示してあり、見て回っていると悲しくなり、目をそむけたいくなりました。

六日、平和折念式典が始まる前、全校の皆さんが一生懸命心を込めて折ってくれた千羽鶴を捧げにいきました。そこには数多くの鶴が捧げられ、私と同じ他の都道府県から来た人たちの鶴もありました。午前八時十五分、全員で黙とうをしました。私は式典に参加できたことをとてもうれしく思いました。七日、班別自主研修で宮島へ行きました。帰りの電車で戦争を体験したというお婆さんに話を聞くことができました。「戦争

中はとてもつまらなかった」とお婆さんは言っていました。とても優しい人でした。この三日間で命を大切にすることや、戦争についていろいろなことを学べました。そして研修に参加した人たちと巡り会えたことをうれしく思いました。私は五十二年前の出来事を学び、八人の仲間と楽しく過ごした日々を一生の思い出として心に残しておきます。

ワシントン

庄瀬中学校 後藤李佳

八月六日の朝、平和折念式典に参加。学校で作った千羽鶴を奉納しに行ったときにはすごい鶴の数に驚き、感動しました。たくさんの方が「平和」を願っているんだと強く思いました。

式典参加者は、白根市の人口より多い四万五千人。子供からお年寄りまで、そして外国人も参加した式典でした。平和宣言、放鳩。八時十五分には一分間の黙とう。そして最後はひろしま平和の歌を合唱して閉式しました。とにかくこの式典は「平和」を心の底から願う式典だったと思います。

でも平和記念公園を歩いているとなんだかおかしな感じがしてきました。五十二年前、ここは焼け野原。原爆投下で何もかも失ってしまった「ヒロシマ」なのに、一九九七年八月六日の今、緑の多い美

広島の色々なことに触れて

白根北中学校 萩原由来

広島一目目は、広島平和記念資料館見学でした。そして私たちが目の前にしたのは被爆後の広島で

変だっただけです。原爆は被爆者だけでなく、その子供までも巻き添えにしてしまっています。戦争はまだ終わっていないのです。一体アメリカはこんなことをしてまでも、本当に原爆を落とさなければならなかったのでしょうか。私なりに調べてみました。アメリカはやはり早く戦争を終わらせたいのです。もちろんこれ以上犠牲者を出したくなかったという気持ちもありますが、そのほかにもソ連が日本に攻めて来るとい



被爆後の広島は模型や人の皮膚や爪、そのほか被爆者の焼けたたれた服や遺品や写真。私が一番心に残ったことは、ケロイドといっ普通で普通の爆弾では絶対に起こせない放射線の影響で、ケロイドは皮膚が膨らみ、ぐちゃぐちゃになったようなもので、治療するには皮膚を切り離し、そこに皮膚を移植するしかありません。何度も手術をしなければならぬ上に、大変難しく、戦争後にそんな余裕もなく、受けられない人もいて大

うこともあったのです。アメリカは何としてもソ連に日本を取られなくなかったのです。理由はいろいろありますが、一つ挙げると日本が社会主義国になってしまいうことがアメリカにとってはいろいろな問題があったようです。人間は本当にこんなに恐ろしいことをしてまでも、自由や地位や名誉を手に入れなくてはならなかったのでしょうか。本当に人間には核兵器など必要なのではないかと、それは私たちが生きていく上でなくてはならないものなのではないかと。私は広島に来て心の底から思いました。二泊三日の広島研修は、私自身の考えをもう一度見直す大切な時間になりました。そして二日目の広島市原爆死者慰霊式、並びに平和折念式典に出られたことを、誇りに思います。

広島から学んだこと

白井中学校 小林由紀

私は今回の広島市の研修で、広島市の原爆による被害の様子と、戦後から現在までの広島市の発展の様子を学んでくることを目的としていました。

八月五・六・七日の三日間はとても勉強になった三日間でした。平和記念資料館、平和の塔、そして原爆ドームなども見学しまし

た。どこも戦争中の苦しみを物語っているように思えました。特に平和記念資料館では、私たちが知らないような戦争中の出来事やその様子が残されていて驚きました。被爆者の死体や皮膚が焼けただれた跡。その中でも一番驚いたのは被爆者の皮膚と爪でした。その方はまだ私と同じ中学生でした。他にも、原爆によって八時十五分止まったままの時計、曲がりくねった一升瓶、影が残った壁など、まだまだたくさん展示してありました。

私の広島市の第一印象は、広くてきれいな街だということでした。高いビルが建ち並んでいるし、緑はたくさんあるし、とても五十二年前に焼け野原だったとは思えません。ここまで広島市を発展させるための人々の努力は、並大抵のものではなかっただろうと思います。しかし広島市では、今も放射線障害が生き残った人々を苦しめているそうです。私はこの三日間で戦争と原爆の悲惨さ、残酷さを強く感じました。一日でも早く、この世から戦争をなくし、世界全体に平和がやってきてほしいと思います。

私はいつかまた広島に行きたいと思っています。皆さんもぜひ一度広島を訪れてみてください。最後に一生懸命鶴を折ってくれた全校の皆さん、先生方、ありがとうございます。